

2. 2022 年度大会報告

今年度の大会は、2022 年 11 月 26 日（土）に、オンラインで開催されました。今大会では、植島幹登氏（早稲田大学大学院）と大窪彬夫会員（早稲田大学）による自由報告が行われました。以下、それぞれの要旨を掲載いたします。

報告要旨

ジンメルの「哲学的文化」と「形而上学的憧憬」

植島 幹登

本報告では、ジンメルの「哲学者」としての側面に光を当てることを主眼として、ジンメルが晩年に残した手記に登場する「形而上学的憧憬」(eine metaphysische Sehnsucht) という概念でもってジンメルの哲学を捉える可能性を提示することを試みた。「哲学」と一言でいっても、多くの領域にまたがって多様な対象に取り組んだジンメルの哲学を何らかの統一性をもった視点で捉えることは容易ではない。

そこで本報告ではまず、ジンメルが哲学というものをどのように理解していたのかを検討した。『歴史哲学の諸問題』（第一版および第二版）や『貨幣の哲学』では、精密科学がもつ二つの限界の「こちら側」と「あちら側」に位置するものとして哲学が指図される。一方の限界は、精密科学が何らかの前提を必要とするという限界であり、哲学はそうした前提を問う営みとしてこの限界の「こちら側」に位置づけられる。もう一方の限界は、精密科学はつねに断片的な内容にのみかかわるという限界であり、哲学はこうした断片的な内容からひとつの世界像を構築するものとしてこの限界の「あちら側」に位置づけられる。こうした二側面を引き継ぐかたちで、『哲学の主要問題』では、無前提に思考することと存在の全体性にかかわることとが「哲学の本質」として語られる。さらに、この『哲学の主要問題』および翌年の『哲学的文化』においてジンメルは、教義から機能へと哲学の本質を移行させることを主張する。これはすなわち、思考の成果ではなく思考の動きそのものに哲学の重点を置くことである。このことをもって、思考の内容ではなく思考の形式にジンメル哲学の統一性をもたせる道が拓ける。他方、『哲学的文化』の序文においてジンメルは、哲学にはこうした「機能的統一性」のほかにもうひとつ「目的論的統一性」があると述べている。これは文化としての哲学がもつ、主観の魂の発展過程としての統一性である。

さて、1916 年にジンメルが書き残したとされる「1916 年、もし総括するなら」という文言から始まる無題の手記では、ジンメルがそれまでに残したものとして上の「機能的統一性」と類比的な「機能的な主題」が提示され、それが「ひとつの形而上学的憧憬」から生じてきたものであると述べられている。この手記ではこの「形而上学的憧憬」の内実は説明されていないものの、それは「憧憬」である以上、何らかの目指すべきものへと向けられたものとして、先の「目的論的統一性」と重ねて解釈することができる。そうすれば、

この「形而上学的憧憬」を、ジンメルという人の主観的な魂の発展過程としての哲学的思索を駆動していたものと捉え、この概念でもってジンメルの哲学に統一性をもたせる道が拓ける。ただし、この「形而上学的憧憬」はジンメルのさまざまな探求のうちに「一様に表れている」とこの手記においても述べられているように、この概念の内実を明らかにするためにはジンメルのあらゆる著作を網羅的に検討しなければならない。